翻訳

マックス・ホルクハイマー

『市民的歴史哲学の端緒』(3)

永井健晴

【承前】

第3章　ユートピア

ホッブズは、スピノーザや啓蒙主義がそうであるように、市民社会という（社会の）組織形式に対して紛れもなく信頼を示している。市民社会やその発展は、歴史が辿るべき目標であり、その根底にあるのは永遠の自然法則であって、この法則を実現することは、最高の道徳的命令であるばかりでなく、地上の幸福に対する保証ともなる、というわけである。これに対して、ルネサンス期の「ユートピア物語」は、経済形式の転換にともなって生じた負担を背負わされた社会層によって抱かれた、絶望感の裏返された表現である。十五世紀と十六世紀のイングランドの歴史は、地主によって家屋や農場から追い払われた小作農について誌している。当時、ブラバントの織物マニュファクチュアに羊毛を供給して収益を上げるために、村落共同体がそっくり牧羊地に転用されたからである。徒党を組んで掠奪しながら放浪する農民たちの運命は、この上なく悲惨であった。何万という人々が支配者によって殺され、他にも多くの人々が、信じられない労働条件の下で、当時発展していたマニュファクチュアの中に強制的にたたき込まれた。まさにこのような社会層の中に、近代プロレタリアートの最初の形態が現われている。彼らは、なるほど農奴制から自由になったが、しかし同時に、露命をかろうじて繋ぐための手段からも自由になった（そのための手段を失った）わけである。彼らの境遇こそが、近代の最初のユー

トピア物語、すなわち王との確執の末に牢獄で処刑されたトマス・モアの『ユートピア』（一五一六年）を成立せしめたのである。その後、すべてのこうした物語には、この名が付されることになった。[53]

ユートピア物語の作者たちは、商品経済が展開してゆく中で、利潤が歴史を駆動する歯車になってゆくありさまを目のあたりにしている。彼らの眼前で、諸都市において蓄積された富から大きなマニュファクチュアやその他の諸企業が生まれ、それらによって諸々の古いツンフト団体は粉砕され、新しい生産形式が支配的になる。生産のための様々な要件は、一方の側に集中する。教養と技能を有する企業家は、新しい種類の生産方法に関する知識や組織能力ばかりでなく、仕事場、原料、道具、船舶、その他の施設をも占有する。これらのものがなくては、利潤をあげる仕事はいまや存在しない。他方の側に、あらゆる手段を完全に奪われてしまった者たちの飢餓と悲惨が集中する。農奴制を生き延びた人たち、大都市の飢えた大衆、崩壊した秩序の瓦礫のような人たちは、労働力を売らざるをえない賃金労働者となる。

ユートピア物語の作者たちは、こうした情勢に対し、「それは財産（所有）のせいだ！」と叫んで反応した。富は中世においては、近代におけるそれとは異なる意味を持っていた。中世の富は、基本的に直接的享受のための財の集積として登場し、人間を支配する権力を必ずしも含んではいなかった。ユートピア物語の作者たちにとって、いまや突然、財産（所有）というものが、悪魔のごとく思われかねないものとなった。このことは、ルネサンス以来新たに生み出された情勢から理解できる。権力は、いまや次第に、領主の称号や世襲の権利に基づくことがなくなり、領主として封じられていた者や親方として認められていた者の手から離れ、生産手段を占有することによって人間とその労働力を裁量する能力が、富と同一視されるようになった。新しい経済様式とともに、こうした裁量権を際限なく利用し尽くすことが可能となった。諸国の国内情勢ばかりでなく、イタリア諸都市の間で始まる諸国民の競争も、血腥い結果を招いた。ユートピア物語の作者たちは、戦争の原因は、イングランドの地主による小作農の追放のそれと同じであること、つまり利得（収益）であることを理解した。

すぐれたユートピア物語の作者たち、トマス・モアとカン

パネッラが二人ともカトリック教徒であったことは偶然ではない。ヘンリ八世が前宰相モアを処刑したのは、モアがカトリックに固執して、王の教会支配権を認めようとしなかったからである。カンパネッラは、スペインの牢獄の中で、スペイン出自の教皇の世俗国家支配権の拡大を熱狂的に擁護する書物を草し、異端者糾弾に躍起となった。トマス・モアは、彼の死刑判決が下された裁判の結審に際して、審判者たちに向かってきっぱりと宣告した。「あなた方は言う。わたしは王に対する裏切り者で謀反人である、と。それは違います。あなた方自身がまさにそれなのです。あなた方は、真実の教会から離脱して、教会の統一と平和とを破壊します。あなた方は恐ろしい未来を準備しています。」(54)

こうした統一と平和の破壊は、一方では、諸個人のエネルギーと新たな競争経済とを桎梏から解き放ち、これを通じてヨーロッパの将来を脅かしていたが、他方では、必然的に市民的な国民国家の成立を促していた。こうした歴史的変動を目のあたりにした二人の男は、自分たちの宗教を字義どおりに受け取っていただけに、彼らにとって、統一されたキリスト教世界という中世的理念は、楽園のイメージのごとく思われていたに違いない。教会は、トリエントで公会議を開き、新たな情勢に対処する姿勢を見せたが、しかしカトリックを擁護して、もっとも卑小な者にさえ父のごとき配慮が施される（宗教的観点から打ち立てられた）秩序は、なお伝統的な民衆宗教の中に浸透している、と述べ立てることができた。民衆の頭の中には、重要な社会的機能、とりわけ寛大な救貧事業を果たしてきた中世の教会がなお生きていたからである。ところが、教会は、自らもまた商品や貨幣のかたちで力を集めることに取りかかったので、こうした機能を放棄してしまった。モアとカンパネッラは、広範な民衆層とともに、カトリック教義の偉大さと神聖さを誠実に確信していたので、自らの信仰にあくまでも忠実であった。だから、統一された人類という（信念に基づく）理念、カンパネッラの言葉で言えば「普遍的一人支配」という理念は、（新たなアナーキーな経済から帰結した）血腥く引き裂かれたヨーロッパを目のあたりにした二人のこころの琴線に触れたに違いない。

この二人の思想家にとって、マキアヴェッリは憎悪の対象とならざるをえなかった。宗教を国家理性の（道徳を凌駕する）ひとつの手段として使うことは、フィレンツェ人マキア

ヴェッリにとっては、あらゆる時代に通用する事実に他ならなかったが、この二人にとっては、現在のあらゆる悪を特徴づけるものであり、それどころかそうした悪の原因だったからである。「ほとんどの君主はマキアヴェッリスト的政治家であり、宗教を支配技術としてのみ使用しているに過ぎない」[55]とカンパネッラは慨嘆している。この二人のユートピア物語の作者は、大国の支配者たちばかりでなく、イタリアやドイツの小国の君主たちにおいても、信心深そうに熱心に語られていることが、実は月並みな決まり文句であり、宮廷で行なわれている極めて卑小な金銭取引を蔽い隠す、中が透けて見えるような擦り切れた外套であることを見抜いていたので、こうしたことは両者にとって、ひとしく憎悪の対象となったわけである。

モアとカンパネッラにとって、宗教は、現実の悲惨を目のあたりにした者によって要求される正義を混じり気なしに保存する器のようなものであった。彼らは、自由競争の掟をキリストの命令に置き換える神聖な共同体を、地上に実現しようとした。人間は狼の本性をもつ、というのはホッブズが当代の現実から読み取った見解であるが、彼らはこんな見解を支持するわけにはいかなかった。彼らからすればむしろ逆に、人間は本性からして悪であるわけではなく、地上（現世）の諸制度、とりわけ所有（財産）制度に組み込まれることによってそうなるのである。カンパネッラはマキアヴェッリを評して、「彼は人間の悪しき動機のみを知るに過ぎない」と非難している。人間を動かすのは、なにもかもエゴイズムばかりといわけではなく、隣人愛という神意に適う衝動でもありうるからである。

だから、ユートピア物語の作者たちにあっては、「本性からは善き人間が、所有（財産）によって堕落している」というルソーの理論が先取りされている。トマス・モアの『ユートピア』では次のように述べられている。「こうしたことをじっくり考えてみますと、わたしは、かのプラトーンの述べていることが完全に正しいと思わざるをえませんし、かれが財の共有をはねつけた国民には、法律を起草することを断ったことを知っても、もはや驚きはしません。この偉大な精神は、すべての人の幸福を根拠づける唯一の手立ては平等の原理の適用にある、ということをはっきり予見していました。けれども平等は、わたしの思うところ、占有（私有）が個人

の権利であり、無制限であるような国家においては不可能です。というのは、こういう国家においては、だれもがもっともらしい口実や権利を述べ立てて、できるだけ多くのものを自分のものにしようと躍起になり、国民の富は、それがどれほど多くとも、結局は少数の個人の占有（私有）に帰してしまい、この少数の個人は、残りの者たちをもっぱら欠乏と悲惨な状態とに放置するからです。[56]」

所有（財産）は、啓蒙主義に属するユートピア主義者にとっても、人間の魂の悪しき諸属性の歴史的源泉である。だからモレリも、マキアヴェッリとホッブズに反対して、次のように記している。「自惚れ、気取り、高慢、名誉欲、欺瞞、阿諛、冷酷非道を一度分析してみるがよい。同じく、数々のわれわれの見てくれだけの徳を解体してみるがよい。すべては、上品に見えはしても危険な要素、つまりは占有欲に解消される。この要素はまた、私心のない態度の底にさえ見出だせるであろう。ところで、私的利害関心という至るところで猖獗するペスト、この潜行する熱、社会に係わるあらゆる種類のこの消耗性疾患は、その養分がないばかりか僅かで危険な酵母（発生源）さえおよそないところに、発生しえたであろうか？――思うに、何ら所有（財産）の存在しないところでは、その危険な結果も生じえないであろう、という主張に秘められた衝撃力を否定するわけにはいかないであろう。[57]」そしてルソーは次のように述べている。「一定の範囲の土地を囲い込み、『これは私のものだ』と厚かましくも述べ立て、そうしておいて、愚かにもこれを真に受けたひとびとを見出だした最初の人間、彼こそが市民社会の最初の創始者であった。[58]」

しかし、ルソーとユートピア主義者との間には、ひとつの重要な対立がある。というのもルソーは歴史的な逆行、より正確に言えば、財産をいきなり平等に分配することを主張しようなどとは考えなかったが、これに対してユートピア主義者たちは、私有財産のない共産主義社会を頭の中で構想し、想像力さえあれば現在ある手段をもってこの社会を実現することができる、と考えていたからである。だから、彼らの願望する国は、未来社会についての近代の社会主義的構想とも、ベイコンの『ノーウァ・アトランティス』とも異なり、未来にあるのではなく、作者たちの住むところからは空間的に遠く隔たったところにあるわけである。モアの「ユートピア」

という国は大洋に浮かぶ島にあり、カンパネッラの「太陽の都」はセイロン島の奥地にある。これらの哲学者たちにとっては、ひとびとを説得、狡知によって、あるいは暴力を用いてさえ当該の国制へと連れてくることができさえすれば、いつでもどこでも完璧な社会を打ち建てることができるわけである。[59]

歴史的諸条件を度外視してしまう点では、ユートピア主義者とホッブズは同じである。というのは、契約論は、社会（国家）を市民たちの自由な意志行為に基づくものとしているが、これと同じく、ユートピア主義者たちは、新しい社会を、時代的な諸事情を考慮しなくても、人々の自由で合理的な決断に基づいてさえいれば、いきなり根拠づけることができる、と信じているからである。モアは次のような趣旨のことを述べている。「支配者たちには、正しい政策だけを提案しなければなりません。というのは、〈次善のもの〉というのは〈善きもの〉の敵でありますし、人間自身が〈善きもの〉となってはじめて、あらゆるものが〈善きもの〉となりうるからです。」もちろん彼は慎重に、こう付け加えている。「これには、さらに〈いくらかの〉年月がかかりましょう。」[60]

けれども彼自身はおそらく、このようなユートピア的な考えを抱きながら、ヘンリ八世の宰相を引き受けたのである。

ユートピアは時代を跳び越える。ユートピアの出発点は諸々の憧憬であるが、これらの憧憬は、社会の一定の状況によって条件づけら（制約さ）れており、そのときどきの変化にともなって姿を変える。ユートピアは、こうした憧憬から出発して、そのときどきに目前に見出だされる手段（材料）を使って、完璧な社会を建設しようとする。だから、それが描き出す桃源郷は、時代に制約されたものに過ぎない。「現実にはどこにも存在しない理想郷」を描き出すべくひとを駆り立てるのは、歴史的に発展してきた社会の現在の状況であるが、この状況はまた、描き出される理想郷の成立・存続・消滅を物質的に条件づけてもいる。何事かを成就しようとするなら、こうした物質的諸条件を正確に知り、これらの条件に自ら関与しなければならない。ユートピアは、こうした事態を見誤っている。ユートピアは、そのときどきの社会の苦しみを抹消し、その善き面だけを取り出して保持しようとするが、善・悪の両契機は同じ諸条件に基づいているのだから、それらは同じ状況の異なる側面に過ぎないことを忘れている。

ユートピアは現実社会の変革をこころざしてはいるが、このこころざしは、労苦と犠牲に充ちた、社会の諸々の土台をなすものを転換することとは結びつかず、空想に置き換えられてしまう。

ところで、ユートピアの教説には論理的難点が含まれている。この教説は、一方では、人間の魂のあり方を事実上左右するのは物質的所有（財産）である、と説きながら、他方では逆に、この魂からは所有（財産）は撤廃されるべきだ、とも説いているからである。一般的に言えば、この教説においては、当然ながら現実生活から強いられる忍耐を要する必要労働が人間の観念（イメージ）の中だけで考えられているという点ばかりでなく、観念（イメージ）は現存する悪しき諸制度に影響を受けているとされているのに、当のこうした観念（イメージ）によって、内容的に細部にまでわたる完璧な社会の理想像を描き出すことが求められてもいる、という点に論理的矛盾があるわけである。ここには、市民的哲学者たちの理論に見られたのと同じ類の絶対的な普遍理性という概念が潜んでいる。もっとも、その理論では、そうした普遍理性は、ユートピア主義者たちとは反対に、現存する社会を聖化し、その諸カテゴリーを永遠のものと詐称するはたらきをしていた。

モアとカンパネッラは、社会にとって必要な財は、社会的労働が合理的に規則づけられて、個人の収益のためではなく、社会一般の諸欲求のために直接的に生産されるならば、充分に生み出されるであろう、という確信を持っている。労働は、犯罪者にばかりでなく万人に強いられる。そうなれば、モアの場合は、毎日六時間、カンパネッラの場合は、毎日四時間でさえ充分なのである。モアの「ユートピア」は、どちらかといえば自由な市民たちの一般的な連合体という性格を持ち、ここでは役人（官職）は選挙される。カンパネッラの「太陽の都」は、中世的な修道院秩序に似通っている。「ユートピア」の秩序の方が「太陽の都」よりも、人間的で、自由で、開明的で、イングランド的であるとするならば、モアよりも大胆に、進歩する科学による自然支配の可能性を認識していたカンパネッラは、自分の描く未来の国の中に、一連の機械を予見している。もっとも、この点ではもちろん、ベイコンが彼に先行していた。カンパネッラはまた、人間の外部にある自然の諸々の力を限定し、利用することができるばかりで

なく、社会に後から生まれてくる人間を科学的な優生学で規制できることを確信している。

ユートピア主義者たちは、理想国家にとどまり、現実の発展傾向を見損なった。ここから、彼らの体系に含まれている難点が生じた、と言えよう。だが、共有（財産の共有制度）に基づいて社会的諸要件を合理的に導くための経済的な前提条件は、彼らの時代には如何なるかたちにせよ存在しなかった。逆に言えば、彼らが想像力で描きだしたものが実現されていたならば、発展は人為的に阻まれていたであろう。というのは、発展を可能にするのは、自由競争の中で開花する個人の創造的な能力であったからである。統領（キャプテン）の人格が決定的な意味を持ったのが航海の成功のためばかりではなかった時代、「統領（キャプテン）」という言葉が他の将来性ゆたかな商工業部門のリーダーにもぴったり当てはまった時代、すなわち人間が行なう生産の内部でそれほど合理化が進んではいなかったために、経済のリーダーの意識とその指導に従う者のそれとの間に歴然とした隔たりがあった時代に、リーダーの物質的生活条件とその指導に従う者のそれとの間に歴然とした隔たりが必然的に生じてくることは、止むを得ないことであった。ユートピア主義者たちが要求したような共有（財産の共有制）や平等の生活水準が実現していたなら、文明は死滅していたであろう。だから、モアやカンパネッラと比較すると、マキアヴェッリやホッブズが進歩的に見えてくる。『君主論』では、ユートピア主義者の試みに関して、次のような正論が述べられている。「わたしの狙いは、それを理解するひとのために、有用なことを書くことですから、真実をそれが現実において見出だせるようなかたちで叙述することの方が、彼らのように妄想を追い求めることより、適切であると思われます。（というのも、幾人かの著述家たちは、一度たりとも見られなかった、あるいは実際には創設されることのなかった共和制や君主制を、頭の中でひねり出しているからです。）〈現に起こっていること〉と〈起こるべきこと〉との間には、かなり大きな違いがありますから、前者を蔑ろにして、後者に従って身を処するひとは、己れの身を保持するどころか、己の身の破滅を招くことになりましょう。」(61)

ユートピアは、実際二つの面を持っている。ユートピアは「存在するもの」の批判であり、「存在すべきもの」の叙述で

ある。その意義は基本的に前者の中にある。ひとりの人間の願望から、彼の置かれた状況を推量できる。モアのユートピアから、当時のイングランドの民衆の置かれた状況が見えてくる。人間的な宰相はこの民衆の憧憬を形に表したわけである。もちろんモア自身は、この憧憬を自らが民衆と共に生き苦しんでいる社会状況に対する批判として認識しているわけではなく、この憧憬の内容を空間的ないし時間的な彼岸へと素朴に投影させているに過ぎない。ルネサンス期のユートピアは、いわば世俗化された中世的天国である。たしかに、ひとが生きているうちに到達できる遠い此岸を構想することには、貧しき者は死んでからでなくてはユートピアに入ることができなかったそれまでの時代からの一つの根本的な転換が示されてはいる。しかし、信仰篤き中世人が、天国の中に自らの窮乏状態が映し出されている、とは思わなかったように、ユートピア主義者たちも、自ら描いた遠き島の中に当時の悲惨な社会状況に対する批判を見出だすことはなかった。

「現存するもの」もしくは「まさに成立しつつあるもの」〔近代的市民社会〕の擁護者として登場する哲学者たち〔マキアヴェッリやホッブズ〕とユートピア主義者たち〔モアやカンパネッラ〕との違いは、ユートピア主義者たちが、農奴制からの個人の解放にもかかわらず、とことんまで考え抜かれた市民秩序においても、現実の悲惨は廃棄されていないし、廃棄されることはありえもしないことを、認識している点にある。ホッブズとスピノーザが、「近代国家は一般的利害関心（公益）を表現する」と告げていたとするなら、特定の富裕な市民層の要求を充たすこと、すなわちこうした市民層の企図する事業が発展することが、社会全体の発展をも促進したかぎりにおいて、彼ら（ホッブズやスピノーザ）は間違ってはいなかった。これらの哲学者たちは、いわば臨床医であった。彼らは個々の身体部分に痛みがある場合には、直接的に必要な治療を行なった。しかし彼らとは違って、ユートピア主義者たちは、社会的苦しみの原因を経済の中に、すなわち私的所有（私有財産）の中に認め、最終的な治療を法律の変更にではなく、所有関係の変更に求めた。

もちろん、社会のあり方を有機体（身体）の病気や健康に喩えることは、危険である。このような比喩を使うと、多くの人々の幸福や生活が「全体」の繁栄と「有機的に」に結び付けられていることなどおよそあり得ない、ということが見

過ごされかねないからである。中世盛期ならば、ヨーロッパのそれぞれの地域で、（共有を経済的基礎とした原始的部族社会との類比において）社会（共同体）の禍福がその個々の構成員のそれと一致するような、個人と社会（共同体）との有機的な関係が存在したかもしれない。いずれにしても、これはもはや近代には当てはまらない。近代社会のあり方は、ヘーゲルの言葉を用いるなら、「諸契機が相互に外面的であり、全体が分裂状態にあること」と定式化することができよう。病気の治療に際しては、部分的な痛みに対する対症療法よりも、身体全体を救うことが優先される。だから、社会のあり方が身体のそれに喩えられると、社会全体のそれぞれの部分において、それぞれ固有の運命を担い、一回限りの生を現に生きている実存的諸個人が、見過ごされてしまうことになりかねない。だが、ユートピア主義者たちが目を向けたのは、まさにこうした社会によって非人間的な生活を強いられた、苦しんでいる個々の人々に他ならなかった。単なる法律の改善ではなく、もっぱら土台（経済構造）の改善だけが、引き裂かれた非人間的な生活に代えて統一的なそれを、不正に代えて正義を生み出すことができる、ということをユートピア主義者たちは確信していた。この点は彼らの作品から読み取れよう。

ユートピア作品からは、次のような問題意識が読み取れる。「功績にはしかるべき敬意が払われるべきであり、たいていそうであるように、『善きもの』がすべて労せずして『悪しきもの』の手に入ってしまうようなことがあってはならない。だが、（現在のように）経済法則が制御されていない場合には、能力差があるにもかかわらず、幸福や不幸の配分は、価値と功績によってではなく、偶然によらざるをえない。」社会が万人の利益を充たすという、市民的自然法によってあらかじめ定められた目的を達成できるのは、多数の個別意志の競争から生じる盲目的メカニズムを経済的土台にすることを放棄し、万人の利益を図って彼らの生活過程を計画的に制御する場合のみである。ユートピア作品からは、このような確信が読み取れる。このように、経済的福祉ばかりでなく、道徳や学問の発展をも人間の経済的諸関係に関連づける理論が、ユートピア作品には含まれているが、こうした理論は、一方では、近代のユートピア主義者たちの夢を、プラトーンの『国家』に結びつけ、他方では、少なくとも「現存するもの」

の擁護者たちと同じ程度には、彼らの夢を現実に結びつけている。

現在の社会秩序が強いる苦しみを耐えなければならない一人一人の関心が社会的な力となり、この力が強まれば強まるほど、ユートピア作品の中で語られている所有（財産）に関する教説もまた、それだけいっそう現実味を帯びた認識となる。たしかに、現在を跳び越えてしまうこと、そして欠けるところのない理想社会を予言しておきながら、現実の社会に潜む諸々の可能性を見過ごしてしまうことは、誤りであった。しかし逆に、より善き秩序についてとことんまで考え抜かないこと、より善き秩序の諸前提を認識しないこと、これもまた同じく、一つの欠陥である。『純粋理性批判』の中では、プラトーンのユートピア作品に関して次のように述べられている。[62]「（プラトーンのユートピア的な）考えの実行不可能性を悪しざまに非難して、こんな考えは役に立たない、と言って片付けてしまうよりも、こうした考えの根拠をより深く追求し、…これに新たな光を当てようとする方が有益でありましょう。」カントは、理想社会が実現されない主な理由は、「立法に際して、正しい理念が蔑ろにされている」点にあるとし、本質的な問題は、こうした正しい理念を立法者に教えることである、と主張している。だが、この場合、カントは、実現の条件そのものに関しては、ユートピア主義者たちと同じ誤りを犯している。カントもまた調和した社会という幻影にしがみついて、こうした社会を根拠づけるに際して、参加者全員の正しい洞察と善き意志をそのつど問題にする以上のことをしていない。だが、ユートピア作品の中に反映されている悪の根源ばかりでなく、救済に結び付けられている目的をもまた認識することができるのは、現在の立法者ではなく、社会的な生活過程において置かれた位置からして自ら困窮を経験する人々である。

ユートピア主義者たちは、現存社会から目を逸らしてしまったのであるが、これに対して自然法論者たちは、「近代市民国家は、その本質からして一般的な繁栄を保障し、市民生活を可能なかぎり安全なものとする」と説明した。自然法論者たちのこうした説明は、かの時代にあっては、まさしく進歩的であり、正当でもあった。だが、彼らは国家の現実を目標のイメージに照らして検証しないで、こうした説明に、それが将来にわたっても通用するかのごとく、頑なに固執した

ので、まさにこのことによって、その当の説明そのものが、イデオロギー（虚偽意識）となってしまった。ユートピア作品は、ある意味では無力な憧憬を表現する純粋な文芸に過ぎない。この意味では、中世社会の拘束状態を単純に否定したに過ぎない自由競争のイデオロギー的な護教論（としての自然法論）と同列である。しかし、この憧憬は、社会が土台（経済構造）の転換に向かって成熟し、そのための諸力（生産力）を発展させる程度に正確に応じて、その無力な性格をかなぐり捨てることができる。すでに明らかにしたように、十六世紀と十七世紀には、共有経済は許されなくなり、競争が社会のさらなる発展のために要求されていた。(63) ユートピア作品は、こうした現実を見過ごしていたが、あらゆる政治的な企図がそれに照らして自らの位置を測定することができるような、基準としての最終目標を定式化している。

こうした目標は、いきなりは実現できないし、（ユートピア主義者たちによって）否定されている所有秩序は、（さしあたり、むしろ彼らの）目的に適っていた。しかし、だからといって、その所有秩序における支配的な諸矛盾が正当化されるわけではない。近代の所有秩序の下で苦しんでいる個人は、単にこころに抱かれるに過ぎない夢の中にしか、逃避の場所を持たない。だからこそ、まさにかの時代においても、社会の下層では宗教が生きているわけである。こうした諸個人は、（ヘーゲルの言う）「世界精神」が自らの崇高な目標という祭壇に供える犠牲である。というのも、彼らは、進歩のために必要とされる歴史的に発展する時代そのものに苦しめられているからである。ここでその両義性（曖昧さ）が明らかになる有機体論的（身体的）な比喩を用いるならば、彼らは、救済（治癒）のために流される血であり、この救済を、ユートピア作品の中で描き出されているような困窮もまた切望している。各人の力が自由に展開されるような社会状態は、世界史的な犠牲を要求するわけである。

この点に、ヘーゲルのそれも含めて、あらゆる観念論の胡散臭さが感じ取れる。ヘーゲルの観念論的な考えによると、あらゆる現実は、絶対的精神と同一であり、「自然と歴史とは、絶対的精神の啓示に奉仕するものに過ぎず、その栄光の器に他ならない。(64)」「歴史の中に姿を現す精神は、それぞれがそれぞれにおいて自ら享受し、自ら充足させている無数の局面へと、自らを委ねている。…精神は、こうした自らの活

動を楽しみながら、自己自身と係わっているに過ぎない。」(65)ヘーゲルのこうした考えには、何か胡散臭いものばかりでなく、何かぞっとさせるものがある。というのは、このように考えるならば、諸個人の一回限りの現実的な死が、その体系の中に繰り込まれているかのように思われてきて、そうした死は、絶対的精神とか超越論的意識といった、個人の死を越えて生き延びていく精神的実体を前にして、単なる幻想に過ぎないかのように思われ、少なくとも正当化されることになるからである。しかし、どのように考えようと、こうした死を理論的に「有意味なもの」とするわけにはいかない。むしろ逆に、まさにこうした一回限りの現実的な死に臨んで、意味を付与しようとするあらゆる形而上学や神義論は無力である、ということが証明される。たしかに、ユートピア作品が映し出しているような現実的な苦しみは説明しがたい不条理であり、だからこそ逆に、そうした苦しみからの救済を考えないわけにはいかないわけである。しかし、必然性を確認することで自己満足を感じているような賢しらな知恵以上に、現実的な哲学の課題と相容れない代物はない。歴史が次第により善い社会を実現してきたこと、歴史がさらに善い社会を実現し得ること、これは一つの事実である。ところで、歴史は諸個人の苦しみと悲惨を越えて進行していること、これはもう一つの別の事実である。しかし、この二つの事実の間には、何ら正当化を行なうような意味は存在しない。

こうしたことを哲学的に考察するならば、いきなりユートピアを実現させ、地上に正義をもたらそうとする人々の企てを、形而上学的な高見から偉そうに見下しているわけにはいかない。トマス・モアの時代にドイツでは、このイングランドの宰相から忌み嫌われたひとりの男が、まったく相応しくない手段で、まるで見込みのないことを企て、挫折した。その男、トーマス・ミュンツァーは、キリストの約束が際限のない苦しみの果てに実現されることになるときまで待ちつづけようとはしなかった。彼は、「キリストも地上の不正に対して忍耐しきれなかった」と言って、神学的な解釈とは対立するキリストの言葉そのものに訴えた。

理想主義（観念論）に備わっている（べき）忍耐が、トーマス・ミュンツァーには欠けていた。たしかに、研究者や実践的政治家は、社会的な困窮をたとえ僅かでも改善するためには、複雑で長期にわたる諸条件そのものについて、知識と

洞察を持たなければならない。しかし、だからといって、こうした困窮を手を拱いて傍観する賢者の諦念が根拠づけられることになるわけではない。苦しみや死は人間がつくっている諸制度によって条件づけられているかぎりでは、やがて人間によって改善されるはずなのであるから、とにかくいまは忍耐を持ちなさい、と説く者がある。だが、こんなことを説く者は、歴史的現状に対して民衆が忍耐を持っていることこそが、まさに彼らが待たざるをえない決定的な理由なのだ、ということをとくと考えてみるがよいのだ。いずれにしても、歴史哲学的には、次のように言えよう。従来の歴史経過を「説明すること」は、不充分ながらも行なわれてきたし、さらになお行なわれなければならない。だが、それを「説明すること」とそれを「正当化すること」とは別であり、そもそもその正当化などできることではない。

ニーチェは、論文「歴史の利益と不利益」の中で、歴史を科学的に扱うことに対して、総じて不信感を示している。ニーチェの行なっている批判は、あまりに犀利過ぎて、かえって効果を弱めてしまっている。しかし、ユートピア作品（空想物語）に歴史（実証史学）を対抗させて、言わば漁夫の利を得ようとするなら、やはりニーチェに示唆を仰ぐにしくはあるまい。いわゆる「歴史の力」の賛美について、彼は次のように書いている。「『歴史の力』の賛美は、実際上あらゆる瞬間を結果のあからさまな賛美へと転化し、〈事実的なるもの〉への奉仕のために、いまや、大方のひとびとが、きわめて神話めいた、かてて加えて実にドイツ的な言い回し、『事実を顧慮する』ことを学んだ。ところが、『歴史の力』に対し背をまるめ、頭を屈めることをはじめに学んだ者は、最後には、それがいまや政府であれ、世論であれ、多数派であれ、あらゆる力に対し支那人のようにぺこぺこ頷き、何らかの『力（権力）』が糸で操る拍子に合わせて四肢を動かしている。あらゆる結果がひとつの理性的必然性をそれのうちに含んでいるならば、あらゆる出来事が〈ロゴス的なもの〉の勝利、あるいは理性の勝利であるならば、ただ速やかに膝を屈し、そしていまや『結果』のあらゆる階梯に拝跪せよ、というわけである。…何とご立派な薫陶であることか、歴史をこんなふうに考察するとは！すべてを客観的に受けとめること、何事にも怒らないこと、何も愛さないこと、すべてを概念的に把握

すること、こうしたことは、どれほどひとを柔和に、従順にすることか。…だから、私に言わせればこうである。歴史がいつも刻印するのは、『かつてこうであった』であり、道徳は、『汝らそう為すべきではない』あるいは『汝らそう為すべきではなかったであろう』である。かくて、歴史は、事実上の非道徳の綱要となる。[66]」

ニーチェは、その後期の哲学的展開において、あきらかに彼自身、（人間の歴史を、ではないにしても）自然の歴史、生物学を崇拝するようになり、実際、単なる生命の「あからさまな賛美」に自ら陥ってしまった。しかし、上の引用では、彼はまだ一つの啓蒙思想を定式化していた。歴史的出来事が完全にうまく説明され、その必然性が首尾一貫して認識されるならば、それによって、行為する我々は、理性を歴史のなかに持ち込むことができる。しかし、歴史は、理性「そのもの」を考察したわけではない。歴史は、いかなる「実体」でもないし、我々がその前に拝跪しなければならないような「精神」でも、「力」でもなく、人々の社会的生活過程から生ずる出来事を概念的に総括したものである。誰も「歴史」によって、生かされも殺されもしないし、歴史は課題を提示しないし、解決することもない。ただ現実的人間たち（実際に生活している人々）だけが、行為し、生涯を克服し、彼ら自身あるいは自然の諸力が生み出した個々の苦しみや一般的な苦しみを減らすことができる。歴史を汎神論的に自立化させ、一つの統一的、実体的な本質存在に仕立て上げることは、形而上学的独断に他ならない。

注

(53) この章では、他にも、似たような内容が叙述されている一連の他のユートピア、とりわけ、モアと同時代のもっともすぐれた哲学者のひとり、南イタリアの僧侶、カンパネッラの『太陽の都』（一六二三年）が、一緒に扱われる。（カンパネッラの叙述については、特にフリードリヒ・マイネッケ『近代史における国家理性の理念』ミュンヘン、ベルリーン、一九二五年を参照。）ユートピア文献には、クロムウエルの急進的信奉者たち、「水平派」からフランス啓蒙主義にいたるまでのものがあるが、アベ・モレリの『自然の法典』（一七五五年）は、フランス啓蒙主義のもっとも特徴的なユートピアとして出版される。十九世紀と二十世紀のユートピアは、別の歴史哲学的意味を持っているので、ここでは考察から外されている。

(54) Prozeßakten, zitiert nach Emil Dermenghem, *Thomas Morus et les Utopistes de la Renaissance*, Paris, 1927, S.

86

(55) Meinecke, ibid., S. 123.

(56) Thomas Morus, *Utopia,* Leipzig o. J. (Reclam), S. 49 f.

(57) Morelly, *Code de la Nature ou le véritable esprit de ses lois,* Paris, 1910, S. 16

(58) J. J. Rousseau, *Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes,* seconde partie, erster Satz.

(59) ユートピア的構想が、その本質からして、暴力と説得とを、より善き秩序を実現するための手段として許容することは、カンパネッラが自分の生涯において証明した。というのは、彼は蜂起の敗北の後に、牢獄の中で、自分の理想をさらに追求し、権力者たちを自分の著作を通じて説得しようとしたからである。

(60) Morus, ibid

(61) Furst, S. 83 f.

(62) Kant, *Kritik der reinen Vernunft,* Leipzig (Reclam), S. 276

(63) 目的と現前する手段とはグロテスクなほど不釣り合いであったから、ユートピア主義者たちが自分たちの理念を実現するためにそれぞれ特別な道を辿ったことは、よく理解できる。モアは支配者たちを説得し、カンパネッラはカラブリアで僧侶の蜂起を準備する。

(64) Hegel, *Enzyklopädie,* S. 463.

(65) Hegel, *Philosophie der Geschichte,* S. 12.

(66) Nietzche, *Werke,* Taschenausgabe BandII, Leipzig 1906, S. 178